

後期：現代聖書学の諸問題

オリエンテーション

1. 創造論
2. 一神教
3. 契約思想
4. 神殿神学・知恵文学
5. 預言
- 6～11. 研究発表：張、南、齋藤、金、岡田、山下
12. 終末論・史的イエス
13. イエスの譬え
14. 初期キリスト教と女性
15. パウロと政治神学 → 火曜日の「聖書演習」へ

<前回>

13：イエスの譬え

(1)「イエスの譬え」解釈史——聖書から宗教改革へ

1. アレゴリカルな解釈・新約聖書の「譬え論」

・ Joachim Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, Göttingen, 1984/10(1947)

結論：アレゴリカルな解釈は新約聖書自体に遡る。マルコ福音書の譬え論

アレゴリカルな解釈の本質と問題性

a. 「共同体の外部と内部の区別」は譬え解釈に次のような役割を与える。

1. 外部向けの教えの形式→秘密の教え＝奥義を外部の者から守る

2. 教育

b. 隠喩の代置理論(Substitution Theory)：暗号と暗号解読

2. アレゴリカルな解釈の伝統から、字義的意味と霊的意味の二重性へ

3. アレゴリカルな解釈の神学的人間論における基礎付け、オリゲネスの解釈学

4. 教義的解釈（教義の読み込み・教義の枠組みにおける読解）

アウグスティヌスの場合（*Questiones Evangeliorum* 2.19）：

5. 宗教改革とアレゴリカルな解釈の克服

(1) 宗教改革の原理と霊的意味の探求との関わり

歴史的・字義的意味（→近代聖書学）から解釈学的プロセスの終点へ

(2) ルターの聖書解釈におけるアレゴリーの扱い方の両義性

アレゴリカルな解釈の適用と放棄

(3) 解釈学的問題から信仰内容の分析へ

オリゲネス：人間存在の構造から聖書解釈へ

(2) 近代聖書学とイエスの譬え——イエスの譬えの歴史性

6. Adolf Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu. Zwei Teile in einem Band*, 1888 / 1899.

・アレゴリカルな解釈からの決別 → 譬えの歴史性と文学性

・隠喩の代置理論、アリストテレスの修辞学 → 文学性の理解における限界

隠喩→アレゴリー、比較→譬え（ロロフ）

・イエスの譬えはアリストテレス的な修辞学とは別の法則性の基づいている。

新しい隠喩理論の必要性

7. ブルトマン、ドッドからエレミアス

- ・歴史性への過度の集中、歴史への偏重
文学的言語的な分類の問題は歴史的社会学の問題設定に従属している。
- ・エレミアス：新約聖書テキストはもっぱらその歴史的原初形態（イエス自身の言葉）の再構成のための資料として理解されている。

(3) エレミアス以降の譬え解釈——歴史から構造、言語自体へ

- 1) 文学性の復権、反歴史主義
構造主義的譬え解釈
- 2) 文学性と歴史性とのバランスの回復から思想へ

↓

解釈学的プロセスに基づく譬え解釈

これは歴史概念と言語概念との本格的な問い直しを要求する。

80年代リクルールの意味

9. Paul Ricoeur, "Listening to the Parables of Jesus."

(4) イエスの譬えから、神の国の現実性へ、あるいは人間存在の時間性

<イエスの譬え解釈の前提・仮説>

- 1) イエスの宗教（宗教運動と宗教思想）の解明について
 - ・19世紀のイエス伝研究の否定的総括
 - ・伝承史の解明の方法論的限界
- 2) イエスの宗教の核心点としての「神の国」のリアリティー（終末論的宗教）
- 3) イエスの譬え研究の意義
 - ・神の国の譬えから神の国のリアリティーを理解すること
譬えの語りと読解において、神の国がいかなる仕方で我々の了解へと到来するか（言葉の出来事）、それは何を（信仰のダイナミズム）引き起こすのか、神の国とは何か。というよりも、神の国は何をもたらし何を引き起こすのか、どこで神の国の到来を知るのか？

11. Eduard Schweizer, *Luke. A Challenge to Present Theology*, John Knox Press, 1982.

in his parables Jesus came into the world of his hearers,
he refused to sum up his parables in any ready-to-wear formula,
they were models of reality and interpreted by the whole work of Jesus (R.W.Funk) (58)
Jesus comes into the area of our experiences.
God cannot be taught but he be experienced. (58)

<構造分析の階層性>

- ・単一の譬えの構造
- ・譬え群の構造
- ・新約聖書の文書単位の構造
- ・新約聖書の構造
- ・聖書の構造：聖書の思惟構造

↓

12. J.D.Crossan, *In Parables. the challenge of the historical Jesus*, Harper & Row, 1973.

↓

到来／転換／行為：

神の国の現実性は、まず、構想力に作用し、新しい存在可能性を開示することによって、行為へと動機づける。詩学から倫理学へ。

1 4. 初期キリスト教と女性

・理念と現実のギャップ→理念の現実化に向かう長いプロセス

(1) 聖書における女性の位置

1. 創世記の原初史物語における男女（アダムとエバ）
手段としてではなく、パートナー（助ける者）として
文明と男女関係の歪み（支配－被支配の構造）
2. 創世記の原初史物語における最初の家族（アダムとエバ）
家（父を中心とした家父長制）の存続か夫婦の愛か、一夫一婦制？
レヴィラート婚
3. イエスと女性：徹底的な平等主義、女性の弟子を伴った宗教活動（旅）
性的分業（女性的役割論）の批判 「マルタとマリア」（ルカ 10.38-42）
「イエス：知恵なる神ソフィアの平等な弟子集団の中で」（フィオレンツァ）
4. イエスの家族批判（「家」批判）
結婚、離婚 → 「家族」の意味転換＝メタファー化
血縁的集団から、精神的絆へ
5. 「家の教会」から制度化された教会へ、教会指導者の男性への集中
制度化における、内と外との相関。制度化の両義性。

(2) 古代の家制度と女性

近代家族との差異は、愛といった概念の差異でもある。

6. 古代世界の女性：「家」制度における女性、イデオロギーとしての純潔
7. テクラ物語：家制度における「女」的役割からの自由、選択肢としてのキリスト教
8. 宮廷風恋愛(courtly love) cf. 結婚
C.S.ルイス 『愛とアレゴリー ヨーロッパ中世文学の伝統』（筑摩叢書）
9. 聖母マリア：古代・中世における女性的な心性、女性性？
母性と処女性、聖女と魔女
世俗的な家秩序と異質な存在（聖なるもの<神の/デーモンの>）
10. グレゴリウス改革（11世紀）：聖職者の妻帯禁止

(3) フェミニスト神学の問題提起

11. 宗教におけるジェンダーの問題
新宗教における「女性」の二面的位置、伝統宗教における女性
12. 制度レベルとイデオロギーレベルにおける男性中心性
・暴力／制度的排除／イデオロギーの諸レベル
・文化・神話的レベルと社会的（政治経済的）レベル
テクニストをどう読むべきか、読みうるか。意味の複合性。
エコ・フェミニズム：ディープかソーシャルか、二分法を超えて。
13. キリスト教とフェミニスト神学
・キリスト教に対するフェミニズムの問題提起、キリスト教の男性中心主義
・イエスの宗教運動の理念と制度化されたキリスト教会の現実
・抑圧され隠されてきた伝統を再発見し、キリスト教を変革する
14. 人間解放という視点：抑圧構造の再生産を越えて、いかにイメージするのか
「解放への見通しは、多様な価値の変革を通して対立するもの同士を新たに統合するよう
な、事物の深井相互の関わり合いの中から生まれるべきである」（リューサー『人間解放の

神学』、37頁)、「共同体の中での全き人間性」(69)

(4) 問題の射程

15. 現代の宗教現象における家族の問題

家族の危機への対応と危機の顕在化・促進

中川淳編『家族論を学ぶ人のために』世界思想社。

16. イエスの家族批判と家族の意味転換

個人の抑圧装置としての「家」(古代地中海的大家族の現実)

血縁関係への過度の信頼がもたらしたもの

血縁関係の昇華(精神化・霊化)＝意味の転換(解体と再統合)

共通の価値(キリスト教では「神の戒め」)へのコミットメント(信仰)による家族の再生

17. 血縁関係のない家族?

超高齢化社会における人間的絆

18. 家族と公共性: 家族は身内びいき(家族エゴイズム)を越えられるか

共通の価値の広がり、下からの共通価値の構築

<聖書テキスト>

①ルカ

8:1 すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。 2 悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、3 ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。

②コリント I

12:13 つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。

③ガラテヤ

3:28 そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。

④コリント I

11:3 ここであなたがたに知っておいてほしいのは、すべての男の頭はキリスト、女の頭は男、そしてキリストの頭は神であるということです。4 男はだれでも祈ったり、預言したりする際に、頭に物をかぶるなら、自分の頭を侮辱することになります。5 女はだれでも祈ったり、預言したりする際に、頭に物をかぶらないなら、その頭を侮辱することになります。それは、髪の毛をそり落としたのと同じだからです。6 女が頭に物をかぶらないなら、髪の毛を切ってしまうなさい。女にとって髪の毛を切ったり、そり落としたりするのが恥ずかしいことなら、頭に物をかぶるべきです。7 男は神の姿と栄光を映す者ですから、頭に物をかぶるべきではありません。しかし、女は男の栄光を映す者です。

⑤創世記

2:24 こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。

⑥マルコ

3:31 イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやってイエスと呼ばせた。32 大勢の人が、イエスの周りに座っていた。「御覧なさい。母上と兄弟姉妹がたが外であなたを

捜しておられます」と知らされると、33 イエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と答え、34 周りに座っている人々を見回して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。35 神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」

⑦マルコ

10:29 イエスは言われた。「はっきり言うておく。わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれでも、30 今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける。

⑧マタイ

10:34 「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。35 わたしは敵対させるために来たからである。人をその父に、／娘を母に、／嫁をしゅうとめに。36 こうして、自分の家族の者が敵となる。37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。

⑨ヨハネ

19:25 イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。26 イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。27 それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。

<参考文献>

1. フィオレンツァ『彼女を記念して——フェミニスト神学によるキリスト教起源の再構築』日本基督教団出版局。
『知恵なる神の開かれた家』新教出版社。
2. 荒井献『新約聖書の女性観』岩波書店。
3. クロッサン『イエス——あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社。
4. リューサー『人間解放の神学』、『性差別と神の語りかけ』新教出版社。
5. 大越愛子『女性と宗教』岩波書店。
6. 関根清三編『性と結婚』（講座 現代キリスト教倫理2）日本基督教団出版局。
7. 池上俊一『魔女と聖女 ヨーロッパ中世・近世の女たち』講談社現代新書。
8. ブライアン・イーズリー『魔女狩り 対 新哲学 自然と女性像の転換をめぐって』平凡社。
9. 上山安敏『魔女とキリスト教——ヨーロッパ学再考』人文書院。
10. 馬杉宗夫『黒い聖母と悪魔の謎 キリスト教異形の図像学』講談社現代新書。
11. 山下勝弘『超高齢化社会とキリスト教』キリスト新聞社。
12. 芦名定道 「東アジアの宗教状況とキリスト教——家族という視点から」『アジア・キリスト教・多元性』創刊号 現代キリスト教思想研究会 2003年、「現代思想とキリスト論」水垣渉・小高毅編『キリスト論論争史』日本基督教団出版局 2003年 529-567頁。